

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

産婦人科の実際 (1998.03) 47巻3号:427～429.

尿閉を主訴として発見された卵巣腫瘍の1症例

中田俊之, 小森春美, 林博章, 石川睦男



尿閉を主訴として発見された 卵巣腫瘍の1症例

中田 俊之*¹ 小森 春美*¹
林 博章*² 石川 睦男*²

尿閉が契機となって発見された卵巣腫瘍の1症例を経験したので、若干の文献的考察も加えて報告する。患者62歳女性、尿閉を主訴に初診、双合診にてダグラス窩に、巨大な腫瘍を認めた。その後、褐色の帯下の出現とともに、尿閉、排尿困難の症状が軽減していった。この帯下の細胞診の結果は、腺癌を推測させるものであった。入院後、子宮全摘術、両側付属器切除術、大網切除、骨盤、傍大動脈リンパ節郭清術、結腸切除、人工肛門造設術を施行した。摘出病理組織は、右卵巣の serous adenocarcinoma であった。腫瘍はダグラス窩へひろがり、子宮頸部後面および、直腸前面の漿膜側から一部では筋層にかけて増殖浸潤を示しており、臨床進行期分類 IIIb 期であった。現在化学療法施行中である。

はじめに

女性患者では尿閉が出現することは比較的まれであるが、今回、尿閉が契機となって発見され、腫瘍内容液が漏出することにより尿閉の症状が軽減していった卵巣腫瘍の1症例を経験したので、その細胞診所見も含めて報告する。

I. 症 例

患者: 62歳女性
主 訴: 尿閉
妊娠分娩歴: 3回経妊 3回経産婦
月経歴: 閉経 53歳
既往歴: 30歳子宮後屈の手術、および卵管結紮術、44歳時パセドウ病にて甲状腺摘出術、54歳時右膝人工関節置換術などである。
現病歴: 尿閉を主訴に泌尿器科を初診、腔壁内に

せりだす巨大な腔壁の腫瘍が認められ、精査目的にて当科外来を初診した。

初診時所見: 腔後壁よりの圧迫により腔鏡挿入が困難であり、子宮頸部の確認ができず、直腸と腔の双合診にてダグラス窩に、巨大な腫瘍を認めた。その後、中等量の褐色の帯下の出現とともに、排尿困難の症状が軽減していった。内診および、超音波検査、MRI 検査にて初診時に比べダグラス窩腫瘍径が小さくなっており(図1)、また、腔鏡診にて後腔壁より褐色の液体の流出が認められた。

この腔内に漏出してきた液体の細胞所見は、核腫大、N/C比が上昇し、クロマチンも増量した、大小不同の細胞が乳頭状に増殖しており、この細胞は、クラスターで出現し重積性が著明であった。また、砂瘤体 psammoma body も多数認められ(図2)、腺癌が推測された。腫瘍マーカーは、CA125が104 U/mlの他はCA19-9、CEA、AFP、CA72-4はすべて異常なかった。

上、下部消化管の精査は異常は認められなかった。

子宮頸部細胞診、および、子宮体部細胞診の結果は異常なかった。

手術時の開腹所見は、淡黄色の腹水が少量存在しており、子宮は鶏卵大、左卵巣は小指頭大で異常なし、右卵巣は母指頭大で表面に粟粒大の腫瘍が散在

*¹Toshiyuki NAKATA, Harumi KOMORI
厚生連総合病院遠軽厚生病院産婦人科

*²Hiroaki HAYASHI, Mutsuo ISHIKAWA
旭川医科大学産婦人科学教室
〒099-04 北海道紋別郡遠軽町大通北3-1

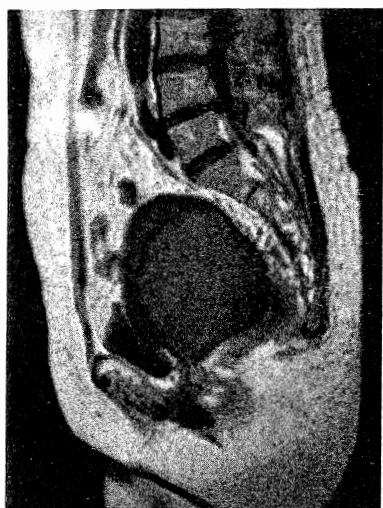


図 1 腫瘍内容液流出時の骨盤 MRI 像 (T1 強調矢状断像)

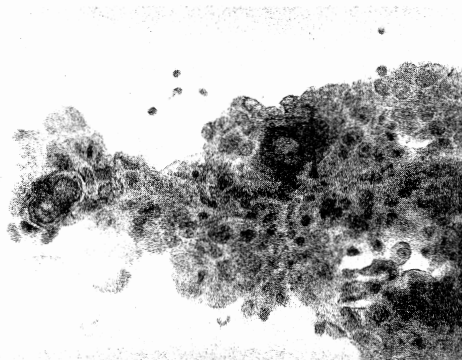


図 2 腔内に漏出した腫瘍内容液の細胞診 (×400)

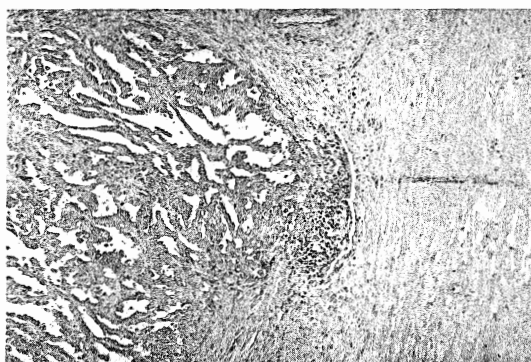


図 3 摘出物病理組織

- (左) 左側の直腸漿膜面の腫瘍が右側の直腸筋層に向かい増殖浸潤している (HE×100)
(下) 直腸漿膜面にみられた砂瘤体 (HE×400)

していた。子宮の後面より直腸にかけてダグラス窩を覆うように超手拳大の腫瘍が存在していた。

手術は、子宮全摘術、両側付属器切除術、大網切除、骨盤、傍大動脈リンパ節郭清術、結腸切除、人工肛門造設術を施行した。

摘出病理組織は、右卵巢の充実性の腫瘍で卵巢表面に露出した、N/C 比増大した異型細胞が、乳頭大、腺管状に増殖する serous adenocarcinoma であった。腫瘍はダグラス窩へひろがり、子宮頸部後面および、直腸前面の漿膜側から一部では筋層にかけて増殖浸潤を示しており、一部で砂瘤体をともなっていた (図 3)。現在化学療法 (CAP 療法) 施行中であ

る。

II. 考 察

女性の尿閉の原因には大きく、機能的障害と器質的障害の 2 つに分類される。そのうち、婦人科的原因疾患は、位置異常、腫瘍、閉塞による体液貯留¹⁾²⁾などに分けられる。柳沢らは婦人科疾患による尿閉の報告例をまとめているが、本邦では腫瘍と閉塞による体液貯留が多いとしている³⁾。腫瘍性疾患では子宮筋腫⁴⁾⁵⁾や卵巢囊腫^{6)~8)}が原因疾患として記載されているが、卵巢腫瘍による尿閉例はまれである。

本症例は卵巣癌がダグラス窩に発生しその腫瘍が発育増大することにより膀胱を外部から圧迫し、尿道を変位させたことにより、次第に排尿困難となり、突然尿閉状態となったものと考えられる。

しかし、骨盤腔内に巨大腫瘍が存在しても尿閉とはならない症例は多く、外部からの圧迫により尿閉となるために、Wardらは、膀胱頸部、尿道への圧迫によるものと膀胱底部挙上による尿道の延長と変位によるものとして上げている⁹⁾。

本症例は、巨大ダグラス窩腫瘍の内容液が腔壁より小さな瘻孔を介して流出することにより膀胱、尿道への圧迫が軽減し、尿閉、排尿困難などの症状が消失していったと推測できる。

また、子宮頸部細胞診、子宮体部細胞診では所見はなかったが、腔腔内に流出する液体の細胞診より腺癌が推測できた。

今回は、この細胞診の結果より、悪性卵巣腫瘍を念頭におくことができ、手術、化学療法と進むことができた。

婦人科における細胞診は、ほとんどが、子宮頸部と体部から採取した標本であるが、今回のように腔腔内に貯留する液体も場合によっては、非常によく診断材料になることが実感させられた。

文 献

- 1) 石田武之, 小泉久志, 脇 博樹, 他: 尿閉を主訴

とした処女膜閉鎖症. 臨泌, 49(6): 424~426, 1995.

- 2) 坂本 修, 菊田芳克, 湧坂俊明, 他: 陰溜血腫のため尿閉をきたした処女膜閉鎖症の1例. 小児科診療, 56(10): 1996~1998, 1996.
- 3) 柳沢良三, 井上滋彦, 板倉宏尚, 他: 結核性子宮留膿腫による尿閉の1例. 日泌尿会誌, 85(5): 690~693, 1992.
- 4) 井浦俊彦, 桑原惣隆, 土用下麻美, 他: 尿閉を呈した子宮筋腫合併妊娠の1例. 産婦の実際, 42(1): 155~157, 1993.
- 5) 田島 惇, 阿曾佳朗, 横山正夫, 他: 婦人科的腫瘍による排尿困難の3治験例. 泌尿紀要, 24(1): 49~54, 1978.
- 6) 田畑雅章, 松浦俊章, 橋本昌樹, 他: 尿閉を主訴とした巨大卵巣嚢腫の1例. 臨泌, 36(1): 1077~1079, 1982.
- 7) 松本美代, 渡辺俊幸, 土門康成, 他: 尿閉をきたした卵巣類皮嚢胞腫の女児例. 泌尿紀要, 39: 85~87, 1993.
- 8) 湯浅 健, 石田 章, 友吉唯夫, 他: 尿閉を契機として発見された卵巣腫瘍. 臨泌, 50(8): 590~592, 1996.
- 9) Ward JN, Lavengood W, Draper JW: Pseudo bladder neck syndrome in women, J Urol, 99: 65~68, 1968.

*

*

*

*

*

*

*